

## 【表現学関連分野の研究動向】

## 日本語文法（現代）

須田 義治

井島正博「複文のテンス」(『日本語学論集第15号』)は、複文の従属節と主節の述語の両方にタがつくつかない場合、従属節は絶対テンスであり、そうでない場合は相対テンスであるとした三原健一「時制解釈と統語現象」(くろしお出版)の見解(「視点の原理」)を再検討し、三原が絶対テンスとしたタにも相対テンスを表す用法があるというように、二義的な場合の存在を指摘している。これは、三原が、文の意味を形態素が直接表すように、文における主節と従属節の時間関係を一般化したのに対して、井島は、従属節のテンスについて、単語と文の意味の階層性にもとづき、より精密な意味分析を行っていることに関係しているように思われる。

道法愛・白川博之「シナイの「未完了」用法について」(『広島大学日本語教育研究(29)』)は、アスペクトに関わるものであるが、シナイの「未完了」用法について、用例を示しながら先行研究を一つ一ついねいに批判し、自らの結論を導くという手堅い論を展開している。

近年『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を使った堅実な記述的研究が増えてきたが、南波春春「「おかしい」と「おかしな」」(『学習院大学大学院日本語日本文学(15)』)もそのようなものの一つと言えるだろう。先行研究において「おかしい」は「滑稽」という意味を表すことが多いが「おかしな」は「不審」という意味を表すことが多いとされているのに対

して、実際の使用例ではその差は見られなかったとするなど、コーパスを使った研究の特徴がよく生かされている。

野田尚史編『日本語と世界の言語のとりたて表現』(くろしお出版)は、さまざまな言語のとりたて表現について統一した理論的な枠組みによって見通しよく記述した論文集である。このような、とりたて表現に関する意味論的なカテゴリーにもとづいた対照研究は貴重な新しい試みであり、あとがきからは共同研究の楽しさも伝わってくる。また、最初に置かれた「とりたて表現の対照研究の方法」と「とりたて表現の研究動向」はとりたて研究一般にとって参考になるだろう。

澤田治美・仁田義雄・山梨正明編『場面と主体性・主観性』(ひつじ書房)という大部の論文集におさめられた宮崎和人「モダリティーの主観化について」は、シナキヤなどの省略形が、シナケレバイケナイなどの単なる文体的な変種でなく、〈評価性〉〈言い聞かせ〉などの独自の主観的な意味を発達させていることを明らかにした理論的な記述的研究である。また、森山卓郎「累加の接続詞とその論理」は「しかも、そればかりか、それに」などの累加を表す接続詞について、アドホック(臨時的)に設定される同類の「文脈的属性」を示すものと規定したうえで、分かりやすい作例を使った着想力豊かなテストによって、それぞれの接続詞の特徴を明らかにし、その分類を行っている。

以上、筆者の立場を反映した選択になっているかと思われるが、おもにテキスト論や文章論に関わるような文法の論文をいくつかあげ、簡単にその内容を紹介した。(大東文化大学)